

## 『グローバル天理』第5号（通巻29号）掲載論文要旨

### 井上昭夫 「巻頭言 世界宗教者平和会議と宗教間対話」

1970年京都で第1回大会が開催された世界宗教者平和会議(WCRP)には、参加する宗教者の人数が大会毎に増加し、1999年の第7回大会には69ヶ国より1000人の参加者を数えるまでになった。しかし、こうした参加者の人数の増加が、会議の成功度と比例しているとは言いがたい。具体的な平和行動や自己啓発を導くことが出来ない平和会議は、会議という姿をした観光的儀式に過ぎないからである。

### 荒川善廣 「「元の理」の探究(14) — 人間と存在 [5]」

宗教学上の類別によると、天理教は啓示宗教とみなされる。開祖が神の啓示を受けることによって始まった宗教の代表的なものは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教である。これら三つの宗教では、聖霊や天使が介在していたり、開祖自身が仲保者(mediator)として位置付けられたりしている。しかし、本教の啓示は、親神が教祖を「やしろ」としてこの世の表に現れた、と言われているように、仲保者を介さない、神の直接の顕現を意味している。「やしろ」としての教祖の魂は今も存命であるから、親神は天保9年以降、目には見えないが、この世に顕現し続けているのである。

### 宮田元 「宗教・スポーツ・教育(9) — 宗教とスポーツ [7]」

相撲は、日本の代表的なスポーツの一つとして、国技とされている。相撲は、互いに力を競う技をさす。その起源は広く世界に求めることができる。日本の相撲の起源伝説としては、『日本書紀』に、垂仁天皇7年7月7日に野見宿禰(のみ-の-すくね)と当麻蹴速(たいま-の-けはや)が天覧相撲をしたとある。その後、8世紀から12世紀にかけて、宮中の行事として7月の七夕に相撲節会が催されることになる。相撲節会には、全国から大力の力士たちが集められ、平安京を中心に東国33カ国から来た者が左、西国33カ国から来た者が右に分かれて勝負を争った。七夕はお盆に入る前に行われる行事で、農耕儀礼と深いかわりをもつ。相撲が七夕に行われたのは、年の後半の米作を占う年占の一つとみられる。

### 末延岑生 「ことばと教育(14) — ことばの元を探る [14]」

私たちは38億年以前からの物の見方がすべて蓄積されて、その基盤に立って見聞きしているのである。サルや他の動物達が見えないものが、人間には当然見えるように、聞こえるように

仕込まれている。その度合いに応じて、考え方も他の動物達と違ってきて当然であろう。

感動と喜びは、ほこりを和らげる大きな力を持つ存在だと私は考える。その喜びを脳で受け入れ、それをもって喜びとするかどうかは、それぞれ本人の今までのほこりと喜びの度合いに基づいた心のもち方にかかっている。人はそうした喜びをことばで表すことができるが、犬は尾を振ることしかできない。

しかしながら、細胞間の喜びのコミュニケーションは、体内での喜びの域を出るものではない。それはまだ外に向かったのものではない。自己満足以上のものではない。本当は一つ一つの細胞が、喜びのうちにエネルギーを発散しながら活動しているに違いないにもかかわらず、しかしそれでも喜びを感じないのは、人がこうしたからだの借り物であることに対する喜びを悟ることがないために、みな細胞のスイッチをオフにしているからにちがいない。言語学を専門にする人々でさえ、人間の特権である喜びとしての音声器官に感動し、それを学問の土台とする者はまれであろう。

しかし、生きとし生けるものだれもが嫌がるあの痛覚でさえ、人はその存在の目的を知ったとき喜びの元として捉えることができる。こうした喜びを生み出すものはいったい何か。

## 佐藤浩司 「天理教東南アジア伝道誌(14)戦前のシンガポール伝道[1]」

天理教が伝道を行う時期、つまり19世紀から20世紀初頭の東南アジアは、タイ（当時はシヤムと呼称）を除いて、ヨーロッパ諸国の植民地となっていた。イギリスは、インドでの支配が確立すると、東南アジアへ触手を伸ばし始めた。ビルマを併合し、マライ半島では、ペナン、シンガポールを買収、マラッカを入手して、本国直轄の海峡植民地とした。さらに、マライ半島の内部の諸地方も保護国とした。

シンガポールは、1819年にラッフルズが、ジョホールのスリム王から購入したものである。板倉タカがお道の信仰を聞き分けて、シンガポールへ布教に渡ったのは、それから約百年後の1912年のことである。

## 堀内みどり 「天理異文化伝道(27)天理教のコンゴ伝道[26]—2代会長時代(1967-1971)[7]」

天理教の布教公認手続きの時、内務省に勤務し、その書類作成を手伝ってくれていたビンディカは、その後失職。失業中は毎日のように教会に参拝していた。彼の故郷ポトポト・ジュエは、教会から7キロという近場でもあり、教会からも頻りに布教に出向くことになり、後に布教所が設置されることになった。また、参拝するビンディカに清水会長は教理を説き聞かせて、それを、ラリー語に翻訳してもらった。こうして、現地語の教理書が出来ていった。また、帰

国を目前に清水 はコンゴ西北部を視察旅行し、この旅行によって、今まで知られていなかった地域の概要があきらかにされた。

### **小滝 透「天理比較神秘論への試み（29）—宗教と世俗 [1]」**

数年前、オウム真理教事件をきっかけに一時政治と宗教の関係がずいぶん取り沙汰されたことがあった。だが、これは、未だ決着の着いた問題ではなく、これからも検討を要する課題としてある。

今回はイスラームとキリスト教を引き合いに出し、その概要を見てきたが、さらに次回もそれを検討してゆきたいと思っている。

### **塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（22）研究方向の修正 [1]」**

他人の命の犠牲に基盤を置く治療、臓器移植や胚性幹細胞の利用は人の心に大きな負担を掛ける。もし、この負担を少なくするような治療が見つかったなら。Adult Stem Cell にそんな可能性をみる。

### **小林正佳 「芸術・癒し・宗教（29）— 鼓舞される喜び」**

踊り手は太鼓に合わせて踊り、一方、囃し手の方もまた、踊りに合わせて太鼓を打つ。その時、太鼓の音はもちろん、動きもまた、口唱歌の言葉に重ね合わせて把握される。すなわち、踊り手は「デンドデンドデン チャッチャカチャ ドデンドデン チャッチャカチャ」という風に振りを覚えているし、囃し手もまた、動きをそのように読み取るのだ。だからこそ、だからこそ太鼓の音が直接動きを喚起するし、目の前の動きを読み取る作業が即座に太鼓を打つ動作に重なり合う。

囃し手は、踊りの動きを即座に読み取って応えてゆく。その音を、踊り手は即座に読み取って応じてゆく。踊り手と囃し手の共働作業は、こうした循環を描いて相互に鼓舞しあう。